



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

天野, 正輝

CITATION:

天野, 正輝. はじめに. 教育方法の探究 1999, 2: i-ii

ISSUE DATE:

1999-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/190229>

RIGHT:

はじめに

既に多くの調査・研究からの指摘で明らかなように、子ども・青年の発達をめぐる今日の状況は、きわめて深刻の度を増しており、実践的にも理論的にも解明を迫られてる課題は実に多い。小学校低学年からの学級崩壊や中学生の「荒れ」現象もかなりの広がりを見せている。高校中退の率はかつてない高さを維持しつづけ、「自分探しの旅」は極めて困難な状況にある。幼児期からの極端に自己中心的で言動が粗暴な子どもや、すぐにパニック状態になる子どもが増えている。子どもの孤立化・孤独化傾向は年々進行し、体力の衰えも著しい。遊びをはじめとする全身で打ち込める活動が、子どものまわりから次第に姿を消し、学習と生活の乖離、学力形成と人格形成との乖離、学びがいや学ぶよろこびの実感が味わえない授業、息のつまるような教室、居場所のない学校という実態は、深刻である。

これらの現象や状況は、教育実践そのものの成立にかかわる問題であり、学ぶものと教える者、働きかけられるものと働きかけるものとの基本的な関係構造のレベルでの「危機」の問題としてとらえることができる。子ども・青年の人間の発達の最大限の達成をめざす「教育的価値」実現の場及び過程が「教育実践」であるから、子ども・青年の発達をめぐる否定的状況は、換言すれば教育実践の危機なのである。

学校での教育実践は、カリキュラムと教材を媒介にして、子どもたちの「学び」を教え・導き・育てる教師の目的意識的な営みである。しかし、教育実践の事実、既定の計画に基づく目的意識的な活動としてのみ存在するのではない。教育実践は生活主体、学習主体である子ども・青年と、同じく生活主体、指導する主体である教師との人格的相互作用のなかで営まれる人間の発達と価値追求をめぐるひとつの生活のドラマなのである。そこには、目的意識的な側面を基本にしつつも、無意図的、無意識的なものも含んだ、すなわち顕在的カリキュラムとかくれたカリキュラムとの両側面が、事実としての教育実践の基盤となっている。教育方法学は、発達途上にある人間の、発達途上にある人間に対する意図的かつ無意図的働きかけの過程としての教育実践の、ダイナミックな全体像を研究対象とし、そこに潜む法則性を明らかにしなければならない。

現在、教育方法学講座は、教育方法と発達教育の二つの分野を含み、各々共同研究に取り組む

主題の解明と研究方法の確立に向けて努力を続けている。

教育方法分野は、当面の課題を、初等から高等教育に至るすべての段階の課程で「知の横断化・総合化」をめざすカリキュラムの開発においている。初、中等教育では、分離教科カリキュラムのもとで、生活との意味連関を欠いた網羅的知識の授受を中心とする実践を克服するカリキュラムの開発と指導の理論構築におき、教科相互の関連づけや教科の枠を超えた「総合」カリキュラムの創造に向けて取り組んでいる。さらに、高等教育の段階でも、専門的な科学・技術における特殊化・細分化・断片化・無意味化の傾向に抗して、学問諸分野の連関や諸知識の相互関係の把握、広範な視野や総合的認識能力の形成（humanistic attitudeの形成）、すなわち新たな「教養としての総合」の識見を養うカリキュラムの研究を進めてきている。

発達教育分野は、人間を生涯にわたって生成・変化していく存在としてとらえる生涯発達心理学的視点と方法を基に、発達観のパラダイムチェンジをはかっている。また、人間を育てはぐくむ文化・歴史的環境に焦点をあて、文化生態学的な発達研究もおこなっている。発達を、変化プロセスとしてとらえるために、ライフ・ヒストリー、参与観察、イメージや描画、語りや物語など、多様な新しい方法を取り入れたフィールド・ワークを行っている。近年は、他界観や死生観を含む発達や世代間伝達の研究や、神戸の震災時における友人の死に関する調査・研究に取り組み、その成果を国際学会をはじめ、さまざまな機会に発表してきている。

両分野とも理論と実践の統合を目指し、学校教育の内外にテーマを設定し、方法としてもフィールド・ワークのアプローチを重視してきている。

1998年度からの大学院重点化によって、教育課程・教育指導講座も一つのエデュケーション講座となり、新たなスタートをきったが、この間のささやかな成果を本紀要にまとめてみた。多くの方々からのご批判をおおぎたい。

尚、1997年度に、京都大学教育学部 教育課程・教育指導研究室名で公にした『教育方法の探究』を第1号とし、本紀要を第2号とした。

1999年2月15日

天 野 正 輝（編集委員）